

## キッシンジャーの訃報に寄せて :リアルポリティークがアジアに残したもの

大庭三枝(神奈川大学法学部教授)



写真：ロイター/アフロ

キッシンジャーの訃報のニュースを目にした朝、私はラオスとベトナムに赴く海外出張の最中だった。その日は、ちょうどラオスの古都ルアンパバーンに滞在しており、ラオス不発弾処理機関（UXO Lao）ビジターセンターを訪問することになっていたのである。ベトナム戦争時、北ベトナムは、ベトナム本土の非武装地帯を避け、ラオス領内に南ベトナムへの補給路、すなわちホーチミン・ルートを通していった。アメリカは、このルートを潰すためにクラスター爆弾による大規模な爆撃を繰り返した。その際の不発弾が多くラオス領内には残存しており、未だに犠牲者が絶えない。センター内に展示されている写真やシアターで流されている映像は、この不発弾による被害を受けた痛々しい犠牲者の姿があった。

このような施設に赴く日にキッシンジャーの訃報に触れるとは、と私は複雑な気持ちになった。彼が、このような被害をもたらす原因となったラオス爆撃に大きな責任をおっていることについて、多少の知識があったからである。

ラオス領域内への米軍の軍事的関与はアイゼンハワー政権期に遡る。ジョンソン政権は、米海空軍によるラオス爆撃作戦、すなわち「秘密の戦争」を開始した。そしてニクソン政権は「ベトナム戦争のベトナム化」を標榜して米軍の段階的撤退を図りつつ、カンボジアやラオスへの爆撃をむしろ拡大したのである。同政権は、北ベトナムとの和平交渉を進めつつ、北ベトナムを弱体化させることで南ベトナムの存続を図ろうとしていた。北ベトナムから南ベトナムへの補給路が存在し、また北ベトナムと手を組む容共勢力が存在したカンボジアやラオスへの爆撃拡大はその手段だったのである。水本義彦氏の言葉を借りれば、「ニクソン政権に入ってラオスへの空爆は熾烈を極めた」（水本義彦「ヴェトナム和平協定とラオス、1969-1973：キッシンジャー＝レ・ドク・ト交渉を中心に」『国際政経』第16号、16-47ページ）。そして当時キッシンジャーは大統領補佐官であり、北ベトナムとの和平交渉に直接関わるなど、当時のアメリカのインドシナ政策のあり方を規定したキーパーソンであった。

戦後アジアにおける国際政治の展開にキッシンジャーが果たした役割は大きい。彼が展開した外交政策の中でも、アジア情勢全般に最大のインパクトを与えたのは米中接近であろう。彼は、当時アメリカが最大の敵と見なしていたソ連と、中国との関係悪化が決定的になったことを見て取り、「敵の敵は味方」という観点から、イデオロギーの違いを超えて中国に対して接近を図った。ソ連の「覇権主義」の拡大を恐れる中国の側も、アメリカとの関係改善を歓迎したことで、両者の接近は実現したのである。

後付け的な見方ではあるが、米中接近はアジアの冷戦構造を複雑化させただけでなく、長期的にはその溶解へと向かわせたといえるかもしれない。アジアの複雑な冷戦構造は、カンボジア内戦の展開に見られるように、この地域の混乱の長期化をもたらした側面もある。他方、米中接近による地域情勢の変化に乗じて日本はいち早く中国との関係正常化を実現させた。中国も、毛沢東の死後の権力闘争を経て、1970年代末には改革・開放へ動き出し、共産党一党支配の維持と市場経済の導入を両立させるという挑戦に乗り出した。アメリカや日本などの西側諸国からの支援や投資が中国のその挑戦を支えた。80年代になると、社会主義下の計画経済の行き詰まりを打破するため、中国と同様の挑戦をベトナムやラオスも志向するようになった。これらの国が西側の資金や技術などの支援を必要とし、西側との関係は微妙に変化していった。こうした変化を受けてカンボジア内戦終結への光がほの見える中、近隣のASEAN諸国もインドシナを「戦場」から「市場」と見なすようになっていく。冷戦終結の決定打は東欧革命などヨーロッパの情勢変化によってもたらされたとはいえ、すでにアジアでは冷戦終結へ向けた構造変化が起きていたのである。キッシンジャーが実現させた米中接近は、その構造変化を引き起こす要因の一つとして働いたといえるだろう。

キッシンジャーが標榜した「リアルポリティーク」の発想の根底にあるのは主にヨーロッパにおいて展開された古典外交であることはよく知られている。「リアルポリティーク」とは、軍事力を中心とするパワーを重視し、国家が合理的に国益を追求する外交スタイルを指す。そしてそれは各国の優れた政治家・外政家たちによるリアルポリティークは、冷徹に見えて、その国の政治目的を実際に達成するのにもっとも有用であるのみならず、その結果として生じる大国間の勢力均衡こそが国際秩序を回復し、維持する。キッシンジャーはこうした観点から、道徳や倫理、価値といったものに基づく外交を否定し、「リアルポリティーク」を高く評価していた。

彼のリアルポリテック的な観点からすれば、米中接近は、ソ連と中国の関係悪化を捉え、たとえイデオロギー

が異なるとしても後者との関係を良好化することで、パワーバランスをアメリカに有利な形にした、ということである。そのことが結果的ではあっても冷戦終結をもたらしたとすれば、パワーと国益追求こそを至上とする冷徹なリアルポリティークこそが国際秩序の安定に寄与するのだ、ということになるのかもしれない。

しかし果たしてそうか。米中間の戦略的競争の激化、ロシア・ウクライナ戦争、ハマスとイスラエルとの戦争など、大規模な武力が投入される軍事紛争が多発している状況は、冷戦終結やその後のリベラル国際秩序の展開における矛盾や、積み残されていた懸案が噴出した結果であるともいえる。むろんそうしたことをすべてをキッシンジャーに負わせるのは無理がある。しかし、彼の「リアルポリティーク」や勢力均衡論の陥穽、特にアジアという、非欧米世界においてもたらした功罪を明らかにする時が今まさに来ていると感じる。

ヨーロッパで展開された古典外交を支えていたのは、王族や貴族層を中心とする人的ネットワークなどを媒介とする、当時のヨーロッパの大国のエリート層の間の同質性であった。外交に関わった当事者たちは、それぞれ各国内において上位の社会階層に属し、宗派の違いはあれどキリスト教文明を共有し、「外交」や「国益」のあり方についての認識が一定程度共有していた。このことが、冷静かつ合理的な計算に基づく外交的駆け引きを可能にし、その結果についての予測可能性を高めていたといえるだろう。米中接近の「成功」とその後の展開は、政治体制やイデオロギーが大きく異なっても「主権国家」である限りにおいてリアルポリティークは適用可能だということの証左のように見えた。イデオロギーなど振りかざさず、国益の最大化を冷徹な計算の下で図る外交をそれぞれが展開することこそが、秩序の安定に繋がるのだ、と。

しかし今の米中間の戦略的競争の激化は、ことはそう簡単ではなかったことを示している。私は中国とアメリカが永遠に折り合わないとか、所詮文化が異なれば関係は安定化し得ないなどとは論じるつもりはない。しかし、政治体制も社会のあり方も異なり、あるべき秩序像も折り合っていない米中間において、妥協を成立させ得る「のりしろ」をどう見いだすか、ということそのものが非常に困難になってきている印象がある。圧倒的な力を持つ帝国の登場を阻み（ウィーン体制で言えば強大なフランス帝国の再来を阻む）、大国それぞれの主権と独立性を確保する、そうした多極的な国際秩序像が共有されていた古典外交の時代と、主権国家間における多様性が増し、よって国益を測る尺度も価値観も多様な今とでは、状況は大きく異なるのである。米中対立はそうした多様性、多元性を増す国際社会における対立はかくあるものだということを示す好例であるともいえる。もちろん冷徹な国益計算による外交で生き延びた非ヨーロッパ世界の国はこれまでも存在した。シンガポールなどはその典型だろう。しかし、覇権国と挑戦国が国際秩序像や価値の次元で対立を深める現在、「リアルポリティーク」は実行可能なのだろうか。

もう一つ、言い古されていることだが、勢力均衡とは、あくまでも大国の主権や独立性の維持、を保証するものであり、小国はその埒外である。もっといえば、大国間の均衡を保つための小国の犠牲は当然視されているといい。ポーランド分割はその典型である。また、植民地が公然と認められた時代にあって、当時の「文明国」からすれば、「未開」に過ぎない非ヨーロッパ領域の王国や帝国などの主権の独立性を保証することなどまったく念頭になかった。なお現在においても、大国ロシアとの正面衝突を避け、それとの勢力均衡を維持することを秩序維持、と見る観点から、ウクライナの望まない妥協を迫る議論が存在する。これは、大国間の勢力均衡の維

持のためには小国の犠牲も当然やむなしとする発想の典型であろう。むしろ19世紀、ヨーロッパにおいて相対的に安定した関係が維持された時代において、各国はヨーロッパ外の「未開」の地において植民地獲得競争に本格的に乗り出していた。

キッシンジャーのインドシナ政策はまさにそうした古典外交的発想を20世紀の非欧米領域への対応に応用した例ではないか。アメリカの和平交渉の相手である北ベトナムは、いわば「野蛮」すなわち文明国ほどのレベルではないがそれなりの力を持っているので一定程度その力を評価し、一段下に見つつも主権国家として扱う。しかし、その北ベトナムとの交渉を有利に進め、その後のインドシナをアメリカや西側勢力にとって望ましい形で固定化するために、ためらわずより小さく脆弱な国であったラオスやカンボジアへの爆撃を拡大した。それはレアルポリテイク的な冷徹な合理主義に基づく戦略的決定だったのかもしれない。しかし、その後のインドシナの展開を見れば明らかのように、キッシンジャーのこの戦略は目標達成に失敗したのである。

現地で話を聞くと、もちろん個人差や地域差はあるだろうが、ラオスやベトナムの人々が今でもアメリカを恨んでいるとか、負の感情を抱き続けているとかいう話でもなさそうだ。ラオスでは、ある人が、オバマ大統領がラオス訪問したときにいかに彼がラオスの人々から歓迎されたか、を力説していた。また近年のアメリカとベトナムの間では、安全保障協力が強化されつつある。米中が今や戦略的競争関係をエスカレートさせていることも含め、時代は大きく変化している。しかしその変化は、様々な協力の深化と対立の激化の交差で彩られている。

キッシンジャーは、良くも悪くも20世紀の国際政治の立役者の一人であった。彼は100年にも及ぶその人生において、第二次世界大戦やベトナム戦争など世界の多くの紛争を目の当たりにし、さらに自分の展開した外交の影響、その後の展開を見続け、晩年まで影響力を行使してきた。その彼が、世を去った。まさに世界が新たなきな臭い匂いに充満している中で。彼のこのタイミングでの死去は、戦乱と共に平和な時代でもあった20世紀とその余波の時代—長い20世紀—のフィナーレを感じさせる出来事だった。これから本格的に始まる新たな21世紀は、どのような時代になるのだろうか。これまでの常識や枠組みのみでは対応しきれない事態が多々展開する混乱の世紀が到来するのだろうか。